カトリック 仙台教区報

No.256　2024年12月25日

発行：カトリック仙台司教区
〒980-0014 仙台市青葉区本町 1-2-12
Tel.(022)222-7371　Fax.(022)222-7378
発行責任：仙台教区広報委員会
URL http://sendai.catholic.jp/

仙台教区司教
ガクタン エドガル

主の御降誕のお喜びを申し上げます

今年で仙台司教として三度目の降誕節を迎えています。教会では、主イエスの降誕を記念する期間は、12月24日の前晩ミサから始まり、主の洗礼の祝日まで続きます。この期間は、イエスのこの世への到来と私たちの心への訪れによる喜びを深く味わい、分かち合う特別なときですが、この喜びは、季節を越えて私たちの日常に息づいているオールシーズンの恵みともいえます。

2025年は「聖年」として特別に祝われる年です。この聖年の原点は、イエスがルカ福音書４章16-21節で朗読されたイザヤ書61章1-2節の言葉、「主の恵みの年」にあります。この宣言はレビ記25章に記された「ヨベルの年」にも通じます。ヨベルの年とは、50年ごとに訪れる、負債の帳消し、奴隷の解放、そして失われた土地の返還が行われる年です。この制度は、神の民が新しい出発を切るための時間であり、社会全体における神の慈しみと回復を示すものでした。

イエスは、この「ヨベルの年」の本質を成就するために来られました。罪の力に縛られた私たちを解放し、神との新しい関係へと導くために、イザヤの言葉を自らの宣言とされたのです。イエスがもたらした救いは、私たちを恐れや執着から解放し、神の子として自由に生きる恵みを与えるものです。しかし、私たちは日常の中で、他者との比較から生まれる嫉妬、未来への不安、富や権力への欲望といった力にとらわれがちです。そのような中でも、主イエスはその生涯、受難と復活を通して、私たちを罪の束縛から解放し、神に愛されている者として新しい命を生きる道を示してくださいます。

私たちがこの恵みに応えるには、日々の生活の中で感謝と祈りを深めることが求められます。2025年、長期の休暇を取ることは難しくても、日曜日を安息日として過ごし、感謝の祭儀（ミサ）にあずかることで、主の愛を実感することができます。また、家庭や地域で他者と関わりながら、主から受けた恵みを分かち合うことも、私たちの使命です。主の降誕による恵みを深く味わいながら、感謝の心で日常を歩むことが、この聖年の意味を生きることになるでしょう。

主の愛と赦しを具体的に表現する生き方を通じて、私たち一人ひとりが神の栄光を証しする存在となれますよう祈ります。

この降誕節が、皆様にとって特別な恵みのときとなりますように。

菊地功東京大司教、枢機卿に

©カトリック東京大司教区

10月6日正午、「お告げの祈り」を祈られる時、バチカンのサンピエトロ広場に集まった多くの巡礼者や訪問者に、教皇フランシスコは、12月7日に開催される枢機卿会議において、21人の枢機卿を親任することを発表なさいました。

その中に、日本のタルチジオ菊地功東京大司教の名前がありました。アジアからは菊地大司教を含むフィリピン、インドの司教たち3人が選ばれました。

他の選ばれた方の地域別を見ると、ヨーロッパ11人、アフリカ1人、北アメリカ1人、南アメリカ5人となっています。

枢機卿の総数は256人となり、そのうちで、教皇選挙の投票権を持つ枢機卿は、141人となる見込みです。

なお、日本人で枢機卿になった司教様は、7人目。東京教区では、土井辰雄枢機卿、白柳誠一枢機卿に次いで、3人目となります。

2025聖年 希望の巡礼者

JUBILEE 2025　Peregrinantes in Spem

2024年10月28日　聖シモン 聖ユダ使徒の祝日に、ガクタン エドガル司教が発表した聖年の書簡と仙台教区の巡礼地を掲載します。

仙台司教区の親愛なる兄弟姉妹のみなさん、

2024年5月9日、教皇フランシスコは大勅書「**希望は欺かない**」で2025年を聖年と宣言されました。

12月29日（日）14時、聖家族を祝う主日に、元寺小路カテドラルで聖年の荘厳な幕開けとして感謝の祭儀を捧げて、ご一緒に巡礼の第一歩を踏み出しましょう。

実際、私たちの生涯は巡礼です。旅の途中では、定期的に休む必要があります。私たちキリスト信者にとって、その安息の日は日曜日です。日曜日は神によって「祝福」され、他の曜日と区別され、「主の日」とされる日です。ですから、主日のミサに定期的に参加しましょう。ミサにおいて、復活された主イエス・キリストは、みことばの光をくださり、また、疲れた心身のための栄養を与えてくださいます。いのちの源泉である主イエス・キリストから流れ出る恵みは、私たちを新たにしてくれます。

聖年にあたり、私は、別紙の通り仙台教区の各地区ごとに1か所の教会ならびに殉教地と殉教碑の計7か所を聖年巡礼所として指定いたします。どうぞ皆さん、この教会と殉教地、殉教碑への巡礼をなさってください。聖年巡礼所で祈り、聖書の言葉を読んで黙想し、ゆるしの秘跡を通して主のゆるしを願い、ミサに参加し、聖体拝領を受けてください。

また、私たちの主イエスが、共に旅する人々の必要に心を配られたように、私たちも人生の旅人である仲間に心を配りましょう。慈善と償いのわざは、常に私たちのキリスト教の伝統の一部です。それらは主イエスの教えの中に見いだされ、私たちが他者にどのように接するべきかの模範を示しています。「慈善と償いのわざ」とは、飢えている人に食物をあげ、渇いている人に飲み物をあげ、病人を見舞い、ホームレスを保護し、囚人を見舞い、死者を葬り、貧しい人に必要なものをあげることです。

積極的に慈善と償いのわざに励んだり、指定された巡礼教会へ出かけたりして、父である神の「免償」を受けましょう。「免償」と訳されるIndulgence（インダルジェンス）とは、とりわけ「気前のよさ」、「親切」、「忍耐」、「理解」を意味します。「免償」は、私たちの努力で得られるものではなく、神の寛大さ

による恵みです。1300 年に最初の聖年が制定されて以来、**「信仰深い神の民は、この祝いを、罪のゆるし、とくに神のいつくしみを十分に表現した免償によって特徴づけられる特別な恵みのたまものとして経験してきました」**と、2025 年の聖年のための書簡で教皇フランシスコは語られています。

私たちにとって 2025 聖年が、救いの「扉」である主イエス（ヨハネ 10：7.9）との生き生きとした個人的な出会いの時となりますようにと願いつつ、希望の巡礼への招きといたします。

共に歩む一人の巡礼者
仙台教区教区長
司教 ガクタン エドガル

2025 年通常聖年「希望の巡礼者」
仙台教区 聖年巡礼所（教会・殉教地・殉教碑）
JUBILEE 2025 PILGRIMAGE PLACES

第１地区 District＃１

①カトリック弘前教会
HIROSAKI CHURCH
青森県弘前市百石町小路 20
対応時間：9:00 ～ 17:00
電話：0172-33-0175　FAX：0172-33-0601
アクセス：JR 弘前駅から徒歩 10 分

第２地区 District＃２

②カトリック四ツ家教会
YOTSUYA CHURCH
岩手県盛岡市本町通 2-12-25
対応時間：月～土 10:00 ～ 16:00
電話：019-654-0557　FAX：019-654-2837
アクセス：JR 盛岡駅から徒歩 15 分

第３地区 District＃３

③カトリック米川教会
YONEKAWA CHURCH
宮城県登米市東和町米川字町裏 41-2
対応期間：１月～３月の第２土曜日・第４土曜日
9:30～13:00
※ただし大雪の場合は、対応不可
アクセス：三陸自動車道 登米東和ICから約15分

④大籠殉教地（旧大籠教会）
OKAGO MARTYRS’ SITE
岩手県一関市藤沢町大籠字上野 66
対応期間：４月～12月の第３木曜日10:30～14:00
※上記以外の日程をご希望の方は、対応可能な場合もございますので、お問い合わせください。

③④の連絡先：カトリック仙台司教区本部事務局
対応時間：月～金（祝日を除く）10:00 ～ 16:00
FAX：022-222-7378
メールアドレス：sendaijubilee2025@gmail.com

第４地区 District＃４

⑤カトリック元寺小路教会 仙台カテドラル
MOTOTERAKOJI Saints Peter and Paul CATHEDRAL
宮城県仙台市青葉区本町 1-2-12
対応時間：月～土（祝日を除く）9:00～17:00
アクセス：JR 仙台駅から徒歩 10 分

⑥広瀬川殉教碑
HIROSE RIVER MARTYRS’ MEMORIAL
宮城県仙台市青葉区桜ケ岡公園 2（西公園内）
アクセス：仙台市地下鉄「東西線」大町西公園駅（T05）から徒歩２分

⑤⑥の連絡先：カトリック元寺小路教会
対応時間：月～土（祝日を除く）9:00～17:00
電話：022-222-5507　FAX：022-222-5535
メールアドレス mototera@st.cat-v.ne.jp
※広瀬川殉教碑に関する問い合わせ対応可
（現地案内は不可）

第５地区 District＃５

⑦カトリック野田町教会
NODAMACHI CHURCH
福島県福島市野田町 2-7-1
対応時間：毎日 7:00 ～ 17:00
電話：024-534-4686　FAX：024-534-4697
アクセス：JR 福島駅から徒歩 11 分

※巡礼を希望される個人・団体の方は、必ず事前にお問い合わせお申し込みを行ってください。また、各小教区のミサ時間や駐車場の有無などもご確認ください。
※団体でミサやゆるしの秘跡を希望される方は、対応できない場合がございますので、事前に日程等をご確認ください。

光州（クワンジュ）大司教区と仙台司教区
姉妹教区縁組を結ぶ

2024年11月11日から14日まで第26回日韓司教交流会が韓国・光州大司教区で開催されたことを機に、その後、仙台教区の司祭たちと光州大司教区の司祭たちとの交流会も行われた。

11月20日最終日、光州大司教区の教区本部の大会議室においてオク・ヒョンジン・シモン大司教と仙台教区のガクタン・エドガル司教による姉妹教区縁組が結ばれた。これから多様な側面で光州大司教区の兄弟姉妹とともに歩むようになります。

（詳細は次号）

仙台教区事務局長
イグナシオ・マルティネス神父

教皇訪日５周年
「東日本大震災被災者との集い」の思い出

教皇フランシスコは、2019年11月23日から26日までの４日間、日本を訪問なさいました。教皇様は、訪日に際して、東日本大震災の地震、津波、原発事故という「三重災害」の被災者たちに、会いたいと切に望んでおられたと聞いています。支援活動の中心を担っていたカリタスジャパン、仙台教区の各地のベースで活動している人々も、教皇様にぜひ来ていただきたい。そして、この現状を見ていただきたいと願っていました。非常に過密スケジュールの中で、福島に、その他の被災地にも足を運んでいただくことはできませんでしたが、なんと、東京のベルサール半蔵門で、「東日本大震災者との集い」が開催され、お目にかかることができました。

©CBCJ

©CBCJ

被災者の中から、岩手県宮古市の加藤敏子さん、福島県南相馬市の田中徳雲さん、原発事故で被災し東京へ避難している鴨下全生さんの３人が、地震、津波、原発事故という被災の現状と担って来た苦しみを、教皇様にそして、この集いに参加している被災者と支援者313人を代表して語ってくださいました。

「すべてのいのちを守るために」と願われた教皇様は、この後、集まった私たちだけではなく、全ての日本人に貴重なメッセージを届けてくださいました。その一部をご紹介いたしましょう。

©CBCJ

愛する友人の皆さん

皆さんとのこの集いは、わたしの日本訪問中の大切なひとときです。…これまでの歩みを分かち合ってくださった敏子さん、徳雲さん、全生さんに、とくに感謝します。この３人のかた、そして皆さんは、三重災害、つまり、地震、津波、原発事故によって言い表せないほどの本当につらい思いをされたすべての人を代表しておられます。災害は、岩手県、宮城県、福島県だけでなく、日本全土とそこに住む人々に影響を及ぼしました。……日本は、連帯し、根気強く、粘り強く、不屈さをもって、一致団結できる人々であることを示してきました。……

何もしなければ結果はゼロですが、一歩踏み出せば一歩前に進みます。ですから皆さん、毎日少しずつでも、前に進んでください。連帯と相互の献身に基づく未来を築くための一歩です。……

左上：加藤敏子さん
右上：田中徳雲さん
左：鴨下全生さん

©CBCJ

特に言及しておきたいのが、福島第一原子力発電所の事故とその余波です。科学的・医学的な懸念に加えて、社会構造を回復するという、途方もない作業もあります。地域コミュニティーで社会のつながりが再び築かれ、人々がまた安全で安定した生活ができるようにならなければ、福島の事故は完全に解決されません。……

この時代は、技術の進歩を人間の進歩の尺度にしたいという誘惑を受けています。進歩と発展のこの「技術主義」は、人々の生活と社会の仕組みを形成します。そしてそれは、しばしばわたしたちの社会のあらゆる領域に影響を与える還元主義につながります。……

このようなときには、立ち止まり、じっくり考え、振り返って見ることが大切です。わたしたちは何者なのか、そしてできればより批判的に、どのような者になりたいのかを省みるのが大事なのです。わたしたちの後に生まれる人々に、どのような世界を残したいですか。何を遺産としたいですか。お年寄りの知恵と経験が、若い人の熱意とやる気と共に、異なるまなざしを培う助けとなってくれます。いのちという贈り物を尊ぶ助けとなるまなざしです。……

神様があなたと、あなたの愛する人すべてに、知恵と強い心と平安の祝福を与えてくださいますように。

心も思いも一つに～国籍を超えた共同体を目指して～

インターナショナルミサ

9月29日(日)、仙台教区カテドラル元寺小路教会において、「世界難民移住移動者の日」に当たるこの日、日本の各教区で、難民、移住移動者のために奉仕している大勢の人が、仙台に集まり、30日まで研修会を開催した。

最初の集いは、元寺小路教会でのインターナショナルミサで始まった。10か国の人々が、みんなで聖歌を歌い、ミサ奉仕するというので、カテドラルには、多国籍の人々も大勢参加し、400人以上の人々がミサに参加した。２階の小聖堂、信徒ホールにも映像が流され、大聖堂からあふれた人々を加えると、何人だったのか、はっきりしないということであった。

ガクタン エドガル仙台司教を主司式に、長崎、京都、東京、大阪、札幌各教区の難民移住移動者担当者、仙台のグエン・カオ・トゥリ神父、シャール・エメ・ボルデュック神父、イグナシオ・マルティネス神父が共同司式した。

みなさんは、今、神の家に住んでいます。私たちは皆、神の民です。心を合わせて、このミサで平和を祈りましょう。一人でも不幸な人がいなくなりますように、とミサが始められた。

第一朗読はベトナム語で、第二朗読はタガログ語で、福音は日本語で朗読された。

ガクタン司教による説教は、先ず、英語で語られ、ついで、日本語で語られた。

イエスは弟子たちに、こう言われた。私に逆らわない者は、私の味方である、と。アジアシノドスのまとめの文書のタイトルは「あなたの天幕を広げなさい」というものであった。今日の私たちに多国籍の人々を、天幕に受け入れて広げていくことが勧められているようである。

さらに、「あなたの手が人をつまずかせるなら、切り捨ててしまいなさい。片方の目があなたをつまずかせるなら、えぐり出しなさい」とイエスは言う。厳しいイエスの言葉である。この意味は、私たちに「目を開けてよく見なさい。手を差し伸べなさい」とおっしゃっていることである。

私たちのもとに来ようとする人々に「知らない」と言うことは、人をつまずかせることである。つまずかせるということは、的から外れているということ。

「心と思いを一つに」し、人々とともに苦悩し、助け合うことは一つの道である。一歩一歩小さな行いを積み重ねて、私たちは信仰者となっていく。私たちもその道を行こう。そう願っている。

10か国語による共同祈願がささげられた。聖体拝領後、司会者によって、ミサ参加者の国が紹介され、拍手で喜びを分かち合った。

その後、教会前の広場で、いろいろな国の人々が歌い、楽器の演奏をし、踊りなど、楽しい交流会が行われた。

2024年度 日本カトリック難民移住移動者委員会（J-CaRM）全国研修会 in 仙台

全国研修会は、インターナショナルミサ後の午後２時から、元寺小路教会大聖堂において森山信三司教（J-CaRM担当）の挨拶から始まった。

最初の講演は、「東北地域における移住者との共生ー震災時の教訓は生かされているのか」と題して李善姫さん（東北大学DEI推進センター／元寺小路教会）が多様性の中での取り組みや問題点を話した。

次にJ-CaRM専門委員の山岸素子さんから「改訂入管法の動き」として、技能実習生や就労、定住・永住についての問題点などが提起された。

次に登壇した、ガクタン エドガル司教は「仙台教区の心も思いも一つに国籍を超えた共同体をめざす。移住者へのキリストの愛」と題して話された。ガクタン司教は、ご自分の司教紋章に書かれている「心も思いも一つに」というモットーや、教皇様のメッセージ「文化間の統合」を通して私たちにキリストの愛と移住者と共に歩む道を示された。

晩の祈りの後の懇親会では、元寺小路教会の信徒ホールに集まり、普段公園で配っている炊き出しグループによるおにぎりや豚汁と仙台ダルクの人々の料理がふるまわれ、交流を深めた。

２日目の 30日(月)は、朝の祈りの後、元寺小路教会の４つのグループが活動報告をした。

- **ベトナムコミュニティーについて**
  仙台教区移住者司牧チームの シスター グエン･テイ･バッチ･マイ(善き牧者の愛徳聖母修道会)とグエン･カウ･トゥリ神父 (エスコラピオス修道会／仙台教区ベトナム人司牧担当)が、仙台教区におけるベトナムコミュニティーの現状と司牧の取り組みを報告した。
- **ISJ(I sing for you)インターナショナルコーラスについて**
  仙台教区で活動しているジュリ･フェクトさん(ケベック外国宣教会の信徒宣教師)が、ISJ の活動について報告した。ISJ は多国籍の方たちが参加する異文化や年齢を超えたグループです。
- **震災後のコミュニティーづくりについて**
  仙台教区外国人支援センターのクラリタ･クレア･サンチェスさん（信徒宣教師）が、東日本大震災後から始まった移住者司牧についての取り組みについて報告した。
- **元寺小路教会の多国籍の典礼部会について**
  担当司祭であるイグナシオ・マルティネス神父と典礼部長の渡辺恵子さんが、外国籍の方と共に活動を続けている典礼部の取り組みを報告した。

上段左から　シスターマイ　ジュリ・フェクトさん
下段左から　クレアさん　渡辺恵子さん

４組の発表後にパネルディスカッションと分かち合いが行われた。その後、山野内倫昭司教(J-CaRM 委員長) と森山信三司教(J-CaRM 担当司教)、ガクタン エドガル司教がまとめのあいさつを話され研修会が締めくくられた。

森山信三司教

山野内倫昭司教

最後に３人の司教と参加された司祭団との共同司式で派遣のミサが行われ、研修会は無事終了した。

（仙台教区広報委員会）

グアダルペ宣教会 創立75周年

グアダルペ宣教会の創立75周年が、メキシコシティーで荘厳に盛大に祝われた。

この宣教会と仙台教区とは、深い関係がある。グアダルペ宣教会は、メキシコの司教団が宣教を目指して設立した宣教会である。

今、最初の宣教師たちが養成されたという神学校は、大きな大学に成長しており、そこのサッカー場が会場になり、大きなテントを張り、その下に、メキシコ司教たち、司祭たち、宣教地から招かれた司教たち、司祭たち、多くの支援者たちが、7000人集まり、盛大にミサがささげられた。

グアダルペの大聖堂への巡礼、その最終日には、シンポジウムが開かれた。テーマは、これまでの75年の宣教活動の振り返りと今後の養成をどのようにするか、というものであった。

壇上の片方には、メキシコの司教たち、もう片方は、宣教地の司教たちが並び、そのテーマで話し合った。

私もグアダルペ会の日本管区長アントニオ・カマチョ神父の両隣に大塚司教と私が話したことを、カマチョ神父が訳してくださったので助かった。

グアダルペ大聖堂の前で、日本の巡礼団とともに

このようなミサやシンポジウムなどに参加するたびに、司教団が宣教師を海外に送りたいと当時のメキシコ司教団はなぜ、そのようなことを決断したのであろうかということを知りたいと思った。話を聞くと、理由は２つあるとのことだった。

メキシコの国は広大である。だが、司祭は足りない。それでも少ない司祭の中から、宣教師をもっと困っている国に派遣することによって、多くの司祭を神が送ってくださるように願おう、ということがあった。第二の理由は、この国の若者たちが、もっと神への信仰を深め、その熱意を燃すためであった。

その海外宣教の第一の地に選ばれたのが、日本であり、その中でも仙台教区であった。それは、戦争で疲弊し、苦しんでいる国であり、その中でも一番困難を極めているのが仙台教区であるという判断であった。

グアダルペ宣教会創立は1949年10月７日のことである。神学校を設立して、宣教師としての哲学、神学を修め、叙階を受けて、最初に来日したのは３人で、小林有方司教の時代、1956年８月18日であった。まず、フランシスコ会経営の日本語学校で、日本語を学び、会津若松教会で宣教司牧を始めた。

宣教当初から現在まで、数えきれない多くのグアダルペ宣教会から宣教師が送られてきた。日本の北に位置する仙台教区の寒さは、神父様たちには多くの困難もあったと察せられるが、それを感じさせる司祭はいない。

現在グアダルペ宣教会の司祭は、仙台教区には４人おられる。

まず、教区事務局長であり、カテドラル元寺小路教会と八木山教会の担当司祭であるのイグナシオ・マルティネス神父、次に、宮城北部の石巻と古川教会の担当司祭であるヴァレラ・ミゲル神父、三陸の気仙沼・大船渡・米川教会担当司祭のロペス･ホセ･アウセンシオ神父、岩手中部の花巻・北上・水沢教会の担当司祭であるマルコ・アントニオ・デ・ラ・ロサ神父である。

感謝しても、しきれない思いで日本に帰って来た。なお、仙台教区だけではなく、グアダルペ宣教会は、東京と京都教区にも司祭を派遣している。

小野寺 洋一神父

平賀徹夫司教　司祭叙階50周年記念のミサ
2024年9月8日　年間第23主日

仙台司教区カテドラル元寺小路教会において、平賀徹夫司教の司祭叙階50周年を記念し、ガクタン エドガル司教主司式、平賀徹夫名誉司教、イグナシオ・マルティネス神父、シャール・エメ・ボルデュック神父の共同司式で、荘厳にミサがささげられた。

ミサの最初の挨拶で、ガクタン司教は、平賀司教の司祭叙階50周年と仙台教区の司教として16年間奉仕してくださったことを感謝いたします。本当におめでとうございます、との言葉で元寺小路教会を埋めていた参加者が、心をこめた拍手で、ミサが始められた。

説教に立ったイグナシオ神父は、まず、「私は、今、大変緊張しています。お二人の司教様の前で、そして、宣教師の模範であるエメ神父様の前で、説教するので、緊張しているのです」と言い、皆さんの笑いを誘い、和やかな雰囲気の中で、平賀司教の紹介を始めた。

平賀司教様は、司祭として50年間たちました。50年という長さよりも充実した質の50年を過ごされて、今があります。その間16年間は司教という重責を負ってこられました。私は、平賀司教様の人生の道を見せて頂いて、感動したことがたくさんありました。

司教様は、1974年1月2日岩手県花巻でお生まれになり、子ども時代を過ごされましたが、1963年花巻教会で洗礼・堅信の秘跡をうけられました。岩手大学の教育学部で学ばれました。神様は初めから人を導く道に準備してくださっていたのだと思います。その後、東京神学校で司祭としての勉強をされ、卒業後、ローマのウルバノ大学で勉強されました。

帰国後、一関教会、気仙沼教会など、多くの教会で司牧し、模範的な司牧者として働かれました。2004年、司教総代理となり、同年7月16日、教会管理者となり、2005年仙台教区司教に任命され、翌2006年司教叙階されました。この長い司祭の歩み、司教として導いてくださったことを感謝いたします。

さて、今日のみことばのお話も少しいたしましょう。

今日のみことばの中にイエス・キリストの教えについて、なさった奇跡について、２つのグループの人々の姿が見えます。１つのグループは、マルコ福音で読んだ人々の姿です。イエス・キリストのすばらしい奇跡を経験した人が声高らかに「この方のなさったことは全てすばらしい」と叫びました。神から来られた方にしかできない恵みだ。この人はすばらしい、と目の前で見たキリストの奇跡で、神の愛を経験したのです。

第二朗読に、もう１つのグループの姿が見られます。初代教会の人々は、まだ、今私たちが持っているような組織も建物も持っていませんでした。信者の家に集まりパンを裂く儀式に、神から呼び集められた人々でした。この人たちは、洗礼を受けていた人々と考えていいでしょう。

洗礼を受けても、その人たちの生き方、価値観は、イエス・キリストの生き方、価値観ではなかったことが分かります。自分の心の一番深いところまで、福音が入っていないのです。だから、ある人々は、恵まれた人とそうでない人への態度が違うのです。あまりきれいな服を着ていない人、家柄のない人には「あなたは、私の足元に座りなさい」と言っていました。

これは、今でもあることです。私たちの価値観、福音に基づいているか、洗礼を受けてもキリストから離れているのではないか。たえず、私たちは、これを考えていかなければなりません。私たちの共同体、神の家族として人間関係、価値観の違いがあっても根本的に兄弟姉妹なのです。みことばに立ち返らなければなりません。きれいな建物の中だけに住むのではありません。私たちは社会にも出ます。家族の中にもいます。

みことばによって、主イエス・キリストの体と血によって、真の共同体、主イエス・キリストが望んでおられる一つの家族、神を賛美する共同体になるよう、共に願いましょう。

仙台教区のうごき

宣教司牧における対人関係のあり方と心の支援

今年の３月１日、四旬節第２金曜日に当たるこの日を、日本のカトリック教会では「性虐待被害者のための祈りと償いの日」と定めている。これは、2016年、教皇フランシスコが、子どもに対して、教会のメンバーが犯した罪の責任について、しっかりと意識できるように、神により頼む日として制定するようにと、全世界の司教たちに呼びかけたことによって制定されたものである。

この教皇の呼びかけに応え、ガクタン司教はこの日にミサをささげるとともに、「カトリック仙台司教区　性虐待、性暴力、ハラスメント防止宣言」を公に宣言した。

2024年３月１日 仙台教区「性虐待被害者のための祈りと償いの日」のミサの中で、「カトリック仙台司教区 性虐待、性暴力、ハラスメント防止宣言」を宣言したガクタン エドガル司教

この中で、仙台司教区の聖職者と奉献生活者は、この宣言を以下の通り具体化いたします、と以下の３点について述べた。

1. 教区へ性虐待、性暴力、ハラスメントに関する訴えや相談が直接通じるように、用件に対応する相談窓口と「子どもと女性の権利を守る委員会」を立ち上げ活動し続けています。
2. 「性虐待被害者のための祈りと償いの日」（四旬節第２金曜日）を啓発し行っていきます。
3. この問題に対する教区全体の意識を高めるため、そして教区の施設や事業所の中での健全な人間関係を作るために聖職者、奉献生活者、信徒、教区職員の研修を継続的に行っていきます。

すでに、この宣言については、2024年５月５日に発行された「カトリック仙台教区報」253号で報道されているので、読者の皆様はすでにご存じのことであろう。

その宣言した事柄が、実行に移されている。８月26日～27日に、まず研修会が原口芳博氏（原口カウンセリングルーム所長）を招き、「仙台教区宣教司牧者の集い」が秋保リゾートホテルクレセントで開催された。

テーマは**「宣教司牧における対人関係のあり方と心の支援」**。

講師の原口氏は、臨床心理士・公認心理師・精神保健福祉士で、信者であり、司牧のこと、宣教のことに精通しており、「具体例も豊富で、大変役立った」、という意見や「もっと若い時に知っていたら、司牧に役立っただろう」という感想を述べた参加者がいた。

ハラスメント防止に関連した、対人関係の問題など、関連したテーマについて、具体例を含めて、司祭や司牧奉仕者を対象にした講話で、よい啓発と研修になった。

健全な人間関係の中で司牧をする必要があり、自分の心の持ち方だけではなく、司牧の相手である人々の心も大切にする必要性を感じた。司祭養成の中に、心の養成、人間的養成を大切にすることも感じた。さらに指導的立場にある人に、人間的養成が求められているので、教会でもこの面をきちんとしなければならない。

特に、司祭、司牧奉仕者として、スピリチュアルな面を人間的な総合的養成に欠かせないので、霊的な痛みを感じて苦しんでいる人が多い現代において、重要である。

司祭や司牧奉仕者には、神を認めていないという人でも、何か人間を超えた大いなるものの存在を認めている人もいる。また、その存在に気づいていない人もいる。教会を訪れる人にはこういう人が多い。しかし、父と子と聖霊の三位一体という神を信じている人も相談者の中にはおられる。司祭や司牧奉仕者は、専門家ではない。専門家に相談する必要がある場合もある。自分を過信しないことも重要な要素である。最後に相談窓口や文献、の紹介をしてくださったのもありがたかった。

話していただいた内容から、私たち司祭、司牧者に必要な注意事項や直面している課題を選んで紹介いたします。

「対人関係の築き方や維持の仕方とハラスメントを防止する」対人関係の体験学習（エクササイズ）

- 相手に「違和感」を与えず、「温かい心」で向き合うこと。
- 相手と自分の「境界線」に気づき、調整する。
- 相手に「温かい関心」を持ち、心から挨拶し、つながり、出会う。
- 相手の話を全身全霊で「傾聴」し、相手が安心する言葉で応える。

「セクシャル・ハラスメント」とは？

- 定　義：「相手側に不快感や嫌悪感や苦痛を与えるような性的な言葉や性的なふるまい」
- 人事院：①他の者を不快にさせる職場における性的な言動
  ②職員が他の職員を不快にさせる職場外における性的な言動
- 判　断：基本的に受け手が不快に感じるか否かによって判断する。
- 禁　止：職員の責務「職員はセクシャル・ハラスメントをしてはならない」
  監督者の責務 防止及び排除に努め、迅速かつ適切に対処しなければならない

「ハラスメントを防止する５つのポイント」

①身体的接触をしない。（励ます意味で肩に手を置いたり、手を触らない。ハグは厳禁）
②相手と自分の「境界線」を感じ取り、相手の「境界線」に侵襲せず、相手が安心するようなバランスを取る。
③穏やかな言葉遣い（話し方）を心がける。
④「親しき中にも礼儀あり」を守る。
⑤相手の境遇などに同情するあまり、親切のしすぎや世話の焼きすぎに注意する。

スピリチュアリティとスピリチュアルケア

「人間の普遍的で根源的な能力である信仰や良心としてのスピリチュアリティを生かすのが、スピリチュアルケアである。

それにより、私たちは死の悲しみや辛さが随分楽になると感じる」

スピリチュアルペインの定義

「スピリチュアルペインとは、人生を支えていた生きる意味や目的が、死や病の接近によって脅かされて経験する、全存在的苦痛である。

特に、死の接近によって「わたし」意識が最も意識され、感情的、哲学的、宗教的問題が顕著になる。」

このような心の支援を行う際には、司牧者の準備が必要であり、次のような準備が示されました。

相談面接の準備

- 魂の準備：黙想と祈りを通して、神の「良き道具」（無力）となれるようと自分を整える。来談者のために祈る。
- 心の準備：自分なりのリラックスの仕方で、気持ちや考えを穏やかにする。
- 体の準備：自分なりのリラックスの仕方で、体の緊張を緩め、体を安定させる。身だしなみを整える。
- 物理的環境の準備：話声が漏れず、静かな落ち着ける部屋を準備する。意志や机の配置、採光などを整える。

また、心の支援を行う際に求められる司牧者の姿勢については、次のように示されました。

相談面接に求められる司牧者の姿勢

- 「第一印象」は重要。「違和感」を与えず、好印象を。
- 訴えの背景（目的・動機・原因など）感じ取る。
- 相手が安全で安心でき、尊重されていると感じられるような雰囲気を醸し出す「温かみ」（I.B. ワイナー）があること。
- 正直で雑念がない率直な出会いによって関わる「純粋さ」（I.B. ワイナー）に努める。神の助けで「今・ここに」を生きている。
- 神に、心底から相手の幸福や伊阿彌氏を祈り求める。
- 「み旨」のみを行い、相手が信仰に立ち帰る道具になる。

最後に、教皇フランシスコの『回勅 兄弟の皆さん』の「示されているのは、自分の所属する集団の仲間かどうかにかかわらず、助けを必要としている人の前にいるようにということです。（中略）ですからこれからは、助けなければならない『隣人』がいる、ではなく、他者の隣人となりなさい、との呼びかけを聞く、そう言いたく思います」（70 頁）が提示され、「他者の隣人となりなさい」がまとめとして示されました。

仙台教区事務局長
イグナシオ・マルティネス神父

【宣教司牧評議会例会】

一年間、「霊における会話」に導かれたシノドスの体験
一年間のシノドスの歩みの実り

宣教司牧評議会は、役員会が毎月開かれ、仙台教区内の宣教と司牧に関する諸問題を取り上げ、話し合い、年１回秋分の日（９月 23 日）に開かれる定例会での話し合いの準備をしてきました。

台風や大雨の心配をしましたが、当日は雨も上がり、良い天気に恵まれました。

参加者は、ガクタン エドガル司教をはじめ教区本部司祭２人、講師の幸田和生司教、兪鍾弼神父、司祭代表として地区長神父４人、各地区連絡信徒代表10人、役員会の信徒５人司教直任の信徒３人を含め計 27 人が仙台司教区カテドラル元寺小路教会大聖堂において、「ことばの祭儀」で聖霊の恵みを願い、シノドスで語られたように、共に歩む有意義な時を願って定例会が始まりました。

１階会議室に移動し、オリエンテーションとガクタン司教の挨拶の後、「宣教司牧評議会規則」の確認があり、５地区から参加者が順に、各地区10分という枠組みの中で，この１年間の自分たちの歩みを発表しました。

定例会は年１回ですが、今年の２月に出された「招きの手紙」にそって、現場レベル、ブロックレベル、地区レベルで歩んできた道のりを発表しました。これまでは、年１度の定例会で報告し、それで終わっていたのですが、今回は、共に歩むシノドス的教会を造るための発表でした。

引き続いて、幸田司教は、「世に派遣されている教会～第二バチカン公会議と『共に歩む教会』～」について、教会の歴史的歩みをたどり、図を描いて、分かりやすく話されました。

ローマ帝国から迫害を受けていた教会から、ミラノの勅令で、信教の自由を得た教会は、社会がキリスト教化されたが、同時に問題も起こり、２つの大きな分裂が起こった。その後、ヨーロッパの近代では、教会と社会の分離が起こり、２つの世界大戦を経験する。20世紀後半、第二バチカン公会議で、教会は、自己理解の根本的な変化をしなければならないことに気づいた。以降教会は「旅する神の民」として歩むようになり、シノドスの道を歩み始めている。

昼食後、兪鍾弼（ユ チョンピル）神父は、「福音宣教へ奉仕する小教区」というテーマで、「教会の福音宣教の奉仕における小教区共同体の司牧的回心」という 2020 年に発表された聖職者省の指針を分かりやすく説明してくださいました。この指針は、第二バチカン公会議と大きく変化した社会的状況に応じて、宣教的な意味で教区と小教区の刷新に焦点を当てることを願ってのことでした。

新しい技術を使いこなしておられる兪神父は、AI を使って、時間以内に準備した原稿をすべて読み上げさせ、参加者を驚ろかせました。

ここ数十年にわたり、社会的、文化的変化が起き、それに伴い、司牧者の指導のもとに、今日の福音宣教の要求に応えるために、回心が必要である。教皇は、「創造性」が要求されていると指摘している。小教区は、キリストとの出会いの中心である。今日の小教区の価値は、以前のような集いや社交の中心ではなく、同伴と親密さの新しい形を見つけなければならない。

小教区の中心は、聖体の秘跡にある。教会の宣教と福音宣教活動の主体は、常に神の民である。小教区は時代遅れの構造ではない。非常に柔軟性があるからこそ、宣教についての創造性が求められる。絶えず、適応と刷新ができるならば、社会のただ中に生きている教会となれるであろう。

以上の講話を聞いた後、「霊における会話」の方法について、シスター秋山が話しました。その後３グループに分かれ、シスター秋山、シスター細谷、イグナシオ神父がファシリテーターとなり、場所も移動し、分ち合いました。

３つのグループの代表者がその発表をし、参加者全員がその分ち合いを共有した後、幸田司教によるこの日の感想が述べられました。

今仙台教区で大切なことは、コミュニケーションということです。色々なレベルでのコミュニケーションの必要性が皆さんの発表の中で述べられていました。

コロナによって、教会の中でコミュニケーションが難しくなっています。教会は人の集まりですから、

人が集まらなければなりません。オンラインでミサにあずかったつもりでいても、共同体はできないし、ご聖体を拝領することによるイエス・キリストに養われることはありません。教会の根本的な意味合いを取り戻す必要があります。教会共同体に帰ることが必要なのです。

もう一つの大切なことは、小教区の出会いの場を通して、関係性を育む、私はこの教会に属している、私たちはカトリック教会の信徒なのだという所属意識、この感覚が必要ではないかと思います。

ミサと一緒に祝い、イベントによって人が集まることにより、信仰が強められる教会になることが大きな課題です。

最後に、ガクタン司教はしめくくりとして強調したのは、各小教区の一致、つながりです。教会をコミュニケーションの場にしてほしい。その中で、自分の役割は、現場の生の意見を聞きたいと思っています。今度は可能ならば、私が出向いて話し合いの機会を設けたいと思っています。

終わりに感謝と恵みを願い、この会が閉じられました。参加者は生き生きと希望をもって、派遣の祝福を受けて各自、教会に向かいました。

仙台教区事務局長
イグナシオ・マルティネス神父

各地区からのお便り

第 1 地区より

〈青森･下北ブロック／弘前ブロック〉
お久しぶりです
2024「合同ミサと交流」in
夜越山(よごしやま)(温泉)

9月29日(日)、10時30分から、平内町(ひらないまち) 夜越山公園において、第 1 地区の青森・下北ブロックと弘前ブロックの共催により、両ブロックの交流と親睦を目的に、「合同ミサと交流」の行事が開催されました。参加者約 140人が、久しぶりに一堂に集いました。

合同ミサは、小松史朗・李錫両神父様の共同司式により、参加共同体・団体の平和と一致、帰天された方の安息の意向をもって、参加者による共同祈願とともに盛大にささげられました。

ミサ後、各小教区共同体・団体からご挨拶があり、久しぶりの再会や交わりの喜びを分かち合い、お互いの絆を確かめ合いました。当日は初秋の穏やかな好天に恵まれ、お昼はお弁当やおにぎり、キャンプ場のバーベキューや焼きそば、サモアをいただき、温泉や散策、子どもたちの遊びなど、楽しい時間を無事に過ごすことができました。司祭団・小教区・関係団体等の皆様、全ての恵みに感謝いたします。

松田 大（波打教会）

〈青森・下北ブロック / 大湊教会〉
献堂 70 周年記念感謝のミサ

1954 年(昭和 29 年)5月、アルマン･ボワベール神父、ルシエン・ボリュー神父着任により創立された大湊教会は、献堂70周年を迎えることができました。10月19日(土)小雨交じりでしたが、玄関先では久しぶりの再会に喜ぶ声や、来訪の方々の挨拶など和気あいあいとした空気でした。

記念ミサは、ガクタン司教様、平賀名誉司教様、エメ神父様、李神父様の共同司式により、厳かに始められました。侍者を初めて担った子どもや、司祭、シスター、県内外教会の信徒など、57人の参加でした。

祝賀会で配布した小冊子には、ガクタン司教からのお祝いメッセージ、エメ神父、李神父のメッセージを掲載することができ、遠藤教会委員長のお礼の言葉を参加者に届けることができました。

「私たちは、旅の新しい一歩を踏み出すにあたり、私たちの人生の師であり、主でもあるイエス・キリストの言葉の一句をしっかりと私たちの心に刻みましょう。『また、よく言っておくが、どんな願い事であれ、あなたがたのうち二人が地上で心を合わせるなら、天におられる私の父はそれをかなえてくださる。二人または三人が私の名によって集まるところは、わたしもその中にいるのである』」(マタイ 18：19-20)

長利 正恵（大湊教会）

第５地区より

〈中通り北ブロック〉
新たにビジョンとミッションを決めました

第５地区中通り北ブロックはマチアス・アントニオ師のリーダーシップのもと、6月2日(日)、松木町教会、野田町教会、二本松教会とコングレガシオン・ド・ノートルダム修道会、イエスの小さき姉妹会の代表者たちが集まり、分かち合いの中から、新たにビジョンとミッションを決めました。
(ビジョン：『救いのある開かれた教会に向かって、ともに歩いていきましょう』、2024 年のミッション：『信仰の土台作りの勉強会（典礼中心）を行う』)

共同体の信仰を深めていけるように歩みを進めています。野田町教会と松木町教会は短時間の勉強会を、毎月第４日曜日の合同ミサ後に行い、典礼の理解を深めていっています。

9月29日(日)には２回目の集まりを持ち、来年の聖年に向けて、ブロックで実行できることを話し合いました。野田町教会は第５地区の巡礼教会とされました。聖年に向けての準備、巡礼者をお迎えする準備がいよいよ始まったところです。

渡邉 祐子（野田町教会）

〈中通り南ブロック／郡山教会〉
主日ミサと教会コンサート

10月6日(日)カトリック郡山教会では２つの行事が行われました。一つは主日ミサが、ガクタン司教様の司式でおこなわれたこと、もう一つはミサ後に、箏曲コンサートが開かれたことです。

主日ミサの説教で、司教様は、今郡山教会で進めている司祭館・信徒館建設を大変うれしく、期待しておられること、郡山教会の信徒の協力に感謝しておられること、司教区として協力を惜しまないと話されました。そして私たち共同体はひとつの体であり、一つのパン、一つの杯にあずかった者の共同体

として愛の行いの教会であること、共同体は愛そのものであると強調されました。

もう一つの行事は、『音楽の恵み』と題した箏曲コンサートでした。石川町で活躍されている箏友会の会員５人と尺八奏者一人の６人編成です。曲目は「六段の調」、「もののけ姫」、「いつも何度でも」、「千鳥の曲」、弾き語り「花さき山」、「ふるさと 21」でした。

最初に、「六段の調」について予備知識の紹介がありました。その旋律が、グレゴリオ聖歌のクレドと呼ばれる「信仰宣言」と重なっているという説です。皆川達夫先生の研究ですが、箏友会の瀬谷代表は、それを実感するとおっしゃいました。

郡山教会はフィリピン、ベトナムなど外国籍の信徒が多く、日本の古典にふれる良い機会であったと思われました。ガクタン司教様は前列に座られて熱心に最後まで聴いておられました。どの演奏もすばらしく感動的でしたが、特に「花さき山」は民話の影絵をスクリーンに映しての語りと箏の演奏で、内容が聖書にも通じる話でした。

コンサート後、司教様は信徒との懇談会へ臨まれ、箏友会の皆さんは集会所で軽食をとって休んでいただきました。箏友会の方から、「郡山教会で演奏できたことがうれしい」、「聴いてくださる人々の姿にとても励まされた」、「聖堂の音響が素晴らしい」とのお声が寄せられました。司教様は箏友会の方々のところにもおいでになってねぎらいとお礼の言葉を述べられました。

そして、特に「花さき山」の物語の内容が素晴らしいので、ぜひ英訳して外国の方にも伝えたい、また、郡山教会の新しい司祭館・信徒館の竣工のお祝いには、ぜひ箏友会の演奏を聴きたいと瀬谷代表にお話されておられました。司教様、演奏者、そして信徒の皆さんの大きな働きによって一大行事が実現できました。とても貴重な時間を与えられたことへの感謝の一日となりました。

吉田 千代子（郡山教会）

エメ師　元寺小路教会でのお別れのミサ
2024 年 10 月 13 日　年間第 28 主日

日本での 54 年にわたる宣教活動を終えようとしている、シャール･エメ･ボルデュック神父様（ケベック外国宣教会）が、母国カナダへ帰られる直前の 10 月13日（日）、元寺小路教会での最後のミサを髙木健太郎神父様と共にささげられた。

ミサの説教でエメ神父様は次のように話された。

今日のミサで読まれた神のみことばは、私たちに大切なことを教えてくれています。

第二朗読では、神は何でも見分ける方です、と言っています。

第一朗読では、知恵を見つけると言っています。

そして、福音の中に現れている若者は、永遠のいのちを求めています。イエスに「永遠のいのちを得るために、何をすればいいですか」と聞いています。イエスは「あなたは十戒を守っていますか」と聞くと「それは子どもの時から守っています」と答えています。イエスが、「もう一歩進んで、財産を人と分かち合うことです」と教えましたが、それを聞いた若者は、それはできなかったのです。

私たちは日常生活の中で、知恵を求め、正しいことを求めるように努めています。ノーベル賞の平和賞が決まりました。人の尊いいのちの価値を守るために、世界中には平和のために働く人は大勢います。３年に及ぶコロナのパンデミックの間に、私たちは、多くの医者や看護師さんたちが、自分のことを忘れ、人のいのちを守り続けるために、力を尽くされたことを知っています。今年は長崎・広島の原爆被災者の方々が、核廃絶を目指し、世界平和のために、ずっと訴え続けてこられた方々に決まりました。

私は54年前に司祭に叙階されました。人生の本当の意味はどこにあるのか、を考え、他の人のためにすべての才能を使おうと思いました。そうして、今も神に感謝しています。立派な人々に助けられて今まできました。それは神の恵みです。

共に喜び、共に苦しみ、私たちは人間として幸せになれます。病気にならないように、とも願うでしょう。それだけではなく、今日の福音の若者は、人に迷惑をかけないように、一生懸命努めました。しかし、財産を分かち合うこと、才能などを出して人のためにベストを尽くすことができなかったのです。

54年間、私は子どもの洗礼式、子どもの初聖体式、堅信式、結婚式、病院訪問をして、苦しんでいる人などのお世話をしました。すべて、これは人間としてお互いが支え合って、生きること。これは私にとって、素晴らしい生き方でした。

髙木神父様はこれから、そのすべてを経験していかれます。牧者として、共に歩むこと、今、シノドスがおこなわれていますが、シノドスのテーマは「共に歩くこと」です。共に歩む共同体です。今の時代こそ、共に歩むことが大事です。

とくに、私たちはどうすればいいでしょうか。社会を見て、強い者はどうしているでしょうか。しかし、福音は、弱い人に目を向けています。必ず、今日の福音に出てくるこの青年もイエスを見て、あの質問をしたと思います。イエスも彼を見て、慈しみを持って見たのです。これは牧者の生き方です。

私は、今月の23日に日本を離れます。私の祈りは、牧者が共同体の中にいつもいるように、私もいつも教会の共同体の中に共にいます。

今朝のNHKのニュースで、教皇様が 21人の枢機卿様を選ばれ発表なさいました、と言っていました。その中に、東京の大司教である菊地功枢機卿様の名前がありました。

日本人で最初の司教になった早坂久之助、その兄弟で韓国の司教になった早坂久兵衛のお二人は仙台のご出身で、土井辰雄枢機卿は仙台教区のご出身、そして、このたび枢機卿に選ばれた菊地功枢機卿は、岩手県宮古市のご出身です。

これからも、仙台教区から牧者が生まれるように、神に祈りたいと思います。アーメン。

教区の諸活動

コミュニティと帰属意識を築く
―仙台教区移住者支援活動での私の旅―

クラリタ・クレア・サンチェス
（仙台教区移住者司牧センター スタッフ / 信徒宣教師）

仙台教区移住者支援活動をする私の旅は、2014年に始まりました。それは、信仰と奉仕への理解が変わった年でした。

それまで、私はカトリック東京国際センター（CTIC）での信徒宣教者として、奉仕してきましたが、CTICを通じて東京教区から派遣され、仙台に到着しました。東日本大震災と津波の影響を受けたフィリピン移住者を支援するという任務を背負って。初めの数か月は、日本文化に適応しながら、東北で移住者が直面する困難と強靭さを目の当たりにし、私の旅は、まったく新しい世界に深く飛び込んだように感じました。

初めて、宣教者としてのユニークな課題を克服する中で、私はガクタン エドガル神父と共に働く幸運に恵まれました。彼は私の相談役となってくださり、彼の指導は、移住者支援センターを単なる支援拠点からもっと深いもの、すなわち司牧ケアの中心地へと変える上でかけがえのないものでした。こうして、私たちの焦点は、コミュニティの中で本物のつながりを育むことになり、支援を受けるだけでなく、教会生活の一部として根を下ろし、大切にされるように招きました。私たちは、個人的で親しみやすい形で教会を人々に届けたかったのです。

年月とともに、私たちのビジョンは広がりました。日本の司教団からの指針を受け、私たちは国境を越え、尊厳と敬意をもってすべての人々を受け入れる教会と社会を目指しました。教区内で日本人と外国人が共に信仰と相互支援の旅を共有できる場を作り出すことが、このミッションの核となりました。このミッションは、福音の「すべての人をキリストご自身として迎える」という呼びかけに基づいています。

私たちはできることから小さく始めて、次に、いくつかの教会を選び、このアプローチを試しました。各教会でサポートネットワークの組織を形成し、個人とのつながりを築くことに多くの時間を費やしました。これらの年に多くの目標を達成しました。これらを以下にご紹介します。

- **コミュニティの構築とネットワーキング**：野田町、松木町、一関、いわき、会津若松の各教会でコミュニティを築くことは愛情のこもった仕事でした。仙台では「I Sing for Joy」国際聖歌隊を立ち上げ、多くの背景を持つ声が信仰に基づいて結集しました。ボランティアが翻訳や英語教師として活動の支柱となり、J-CaRM（日本カトリック難民移住移動者委員会）、タリタ・クム（難民移住移動者の中でも、人身売買の部会）、CTIC、聖ウルスラ修道会などの団体とのパートナーシップも拡大しました。
- **礼拝と霊的成長**：礼拝は多言語のミサガイドを備え、日本語、タガログ語、ベトナム語、スペイン語での定期的なミサを行うことで、より包括的になりました。季節ごとの黙想と典礼も行い、福島県での毎月のタガログ語ミサは多くの人にとって大切な伝統となりました。
- **教育と啓発**：聖書研究会、英語クラス、女性のための支援グループを立ち上げ、人生の挑戦の中で人々がコミュニティと信仰を見つける手助けをしました。ニュースレターや全国誌への寄稿を通じて、私たちの活動の目標や物語を共有しました。
- **社会的および司牧支援**：カウンセリングや法律紹介、病院や家庭への訪問を通じて、私たちは正義と平和、創造の尊重を支える存在であろうと努めました。

現在、私たちのミッションは前進しています。活動の第２段階では、福島でのフィリピン人リーダーの中核グループが、私たちの活動を拡大する準備を進めています。日本の高齢化社会、社会の同質性、言語の壁という課題を感じつつも、私たちの包括的な取り組みへのコミットメントは強化され続けています。私は忍耐、明確さ、対話の重要性を常に再認識しており、それは「シノドス（共に歩む教会）」における傾聴と統合の焦点と一致しています。

この旅は希望と決意の道であり、すべての移住者が帰属感と「家」の感覚を見つけられるような思いやりのあるコミュニティを築き続けていきます。

岩手県カトリック幼保教職員研修大会

7月27日(土)、岩手県内(8園)のカトリック幼稚園・保育園の職員30人が集い、研修を行いました。第一講話は「神様の愛を伝えるために」のテーマで、園での職員宗教講話や園児の宗教教育について実践報告がありました。参加者の多くは、宗教教育の重要性を感じているが、聖書に触れる機会が少なくなり、職場に信徒がいない場合に、どのように子どもたちに教えたら良いのか困っているという声が聞かれました。今や一般の教職員に園の運営が委ねられ、カトリック教育に携わる者が責任者も職員も互いに大事なパートナーであるという意識を持ち、カトリック園を継承していく転換の時であることを新たにした研修でした。第二講話は、来賓に仙台教区司教ガクタン エドガル司教様をお迎えし、ヨハネの福音4章7～17節イエスのもとに水を汲みに来た「サマリアの女」について、もう一つは「善きサマリア人」ルカ10章25～37節のお話を通して、迷う人を探し求める神、ひとり子を賜ったほどにこの世を愛してくださった神、私たちも永遠の命にあずかることができるように道を開いてくださった神の愛を、司教様の愛溢れる力強いお話を伺い、参加者は励ましと勇気をいただきました。

教皇様が全世界に呼びかけていらっしゃるシノダリティ(ともに歩む共働性)を、教会の姿として人々の営みに無条件に寄り添い、誠実に関わり共に歩んでいくために、カトリック園で働いている私たち保育者が、信仰の有無を超えて協力し合うことが求められます。心の奥にある教師としての情熱と良心との対話を深め、さまざまな問題を解決していく力をくださる聖霊の働きに信頼し続けたいと思います。第三千年期において神が教会にお望みになる道としてのシノダリティの道をすべての人々とともに祈りながら生きることを実践の中で示していけますように。

盛岡白百合学園幼稚園 園長　髙橋 正子

第一回 宮城県カトリック幼保連盟研修会開催！

2024年8月19日(月)午前10:00～午後3:30まで、仙台ガーデンパレスを会場に宮城県内カトリックの幼稚園13園、保育園･こども園6園の先生方が121人集い、第一回宮城県カトリック幼保連盟研修会が開かれました。

また、ガクタン　エドガル司教様と当連盟発足に多大なご尽力をいただいた当連盟前々委員長の森本幸子先生にもお越しいただき、大変うれしく感激しました。

思えば、このような研修会は宮城県カトリック幼稚園連盟が発足以来、毎年行っていましたが、コロナ禍のため、2019年の第49回研修会を最後に実施できなくなったのです。

その間、日本カトリック幼稚園連盟が組織変成され、日本カトリック幼保連盟となったことを受け、「全国の歩みと同じく宮城県もカトリックの幼児施設がつながりましょう」と保育連盟と幼稚園連盟が話し合い、宮城県カトリック幼保連盟が誕生し、今回の第一回研修会が開かれることになったのです。

この記念すべき第一回の講師として、お迎えしたのはたくさんの著書も手掛けておられる、カトリック宇部教会の片柳弘史神父様です。

テーマは、「神さまの愛をどう伝えるか～聖書の言葉とマザーテレサの実践に学ぶ～」です。午前は、インドで実際にマザーテレサのもとで、活動された体験をパワーあふれる言葉でお話しくださいました。私が講話で印象深く心に残ったことは、「あなたは愛されて生まれてきた、大切な人。貧しい人たちの中にイエスを見なさい。周りの人からも、自分でさえ自分を受け入れられない時でも神さまはあなたを受け入れてくださいます」というお話です。オーストラリアから来た農家の主婦は全てに絶望し死を選び、でも最後にマザーテレサに会いたい一心で着の身着のまま、飛行機に乗ってインドに来たが、マザーに会い、見つめられ、自分を受け止めてもらい、マザーから「わたしにできないことが、あなたにはできます。あなたは子どもに食事を作り、育てることができるでしょう」とお話され、マザーの眼差しに「自分はこんなに愛されている」と感じることができて、彼女は生きる気力を取り戻し家に戻ったというお話がありました。

神父様が目の前で見、経験したことをお話くださったので、私も本でエピソードは知っておりましたが、実際に神父様からお話を聞き、さらに心に響きました。私たちも日々関わる目の前の子どもと保護者にマザーのように全身全霊で「あなたは大切な人」との眼差しで向き合うことを改めて実践していこうと思いました。「大きなことをする必要はありません。小さなことに大きな愛を込めればいいのです」というマザーテレサの言葉を胸に…。

午後は聖書の言葉からの学びをたくさんいただきました。中でも祈ることは子どもの情操にとても良いことであり、平和を願う心、感謝する心が育ち、祈る時は自分と向き合う時間となり、神さまの前で自分を見つめ直す姿勢ができる、というお話が心に残りました。今後も子どもたちと共に祈ることを大切に紡いで行きたいと思いました。

研修の最後は、ガクタン司教様、片柳神父様、小野寺洋一神父様（角田カトリック幼稚園園長）の共同司式ミサが行われ参加者全員で共に祈りました。

参加した先生方は祈りのうちに、明日からの保育に神さまの愛を伝えていく使命を改めて心に刻むことができました。

最後に第一回連盟研修会の準備に関わってくださった全ての先生方に大変感謝いたします。学び深い連盟研修会が行われたことを「神に感謝。」

宮城県カトリック幼保連盟委員長　佐藤 香

（学校法人東北カトリック学園
塩釜カトリック幼稚園）

第12回「いのち」勉強会で池田まりさん講演

正義と平和仙台協議会主催の第 12 回「いのち」勉強会が、11月 17日午後２時から元寺小路教会信徒ホールで開催された。テーマは「これからの教会の歩みに種をまき、語り継ぐことの大切さ」と題されたもので、講師は元寺小路教会の信徒マリア池田まりさん。

担当司祭のイグナシオ・マルティネス神父から、「歴史を学ぶだけではなく、この社会の中に生きている私たち若い世代に、どのように信仰を生きていくか、大切なメッセージを伝えてください」という言葉で、参加者約 100 人が、仙台市の中心で生まれ、戦前、戦後を体験された講師の話に耳を傾けた。

大正、昭和と軍部が台頭してきたころから、キリスト教が次第に敵視されるようになった。1941 年の開戦と同時に、警官が元寺小路教会の司教館を収容所として接収、外国人が司祭も牧師も収容された。周囲には高い塀が建てられ、教会にあったラテン語の祈祷書などはすべて「敵国のスパイのもの」と言われて持っていかれた。

終戦直前の 7 月 10 日、空襲で、仙台は火の海になった。元寺小路教会も焼失。終戦後、アメリカ軍の総司令官が、宗教団体法の廃止を命じ、1946 年の天皇の人間宣言で、宗教的自由を生きることができるようになった。

東仙台にあったドミニコ会の修道院と神学校は、「敵国の財産」と言われ、軍が使用していたが、返還

され、収容所に入れられていたビソネット神父が元寺小路教会に帰って来られた。この神父が米軍と交渉して、アメリカ兵の仮兵舎（当時かまぼこ兵舎と言われていた）をもらい受け、改造し、仮聖堂として使っていた。日本人の信者も増え、大祝日は、聖堂に入りきれず、上杉小学校をお借りすることもあった。

浦川和三郎司教様時代、ケベック外国宣教会がカナダから、ベトレヘム宣教会がスイスから来てくださった。さらに、聖ザビエルの聖腕が日本に来るということがあり、当時の国鉄の仙台駅に信者さんが 2000 人で迎え、深沢豊治神父が仙台市内を行列して歩いた。先頭は MP が先導し、5000 人がその後に続き、最後は白百合学園の校庭で、礼拝式を行ったのも、忘れられない思い出である。池田さんは、長い人生の中で、たくさんの苦しみや試練がありましたが、いつも信仰と希望を持って生かせていただきましたことの感謝の気持ちを忘れないと話した。

その講演会の後に参加者から質問の時間が設けられました。たくさんの質問、感想や感謝のことばの中で特に印象に残ったのは長生きの秘訣について聞かれたら「毎日にミサに参加すること」という答えでした。人生の真ん中に神さまとのかかわりを置くことを聞いた多くの人々が感銘を受け、現代に生きる私たちカトリック信者には大きな模範と慰めをもたらした勉強会であった。

Sr. 長谷川 昌子（仙台教区広報委員）

第16回 東北塾 開催

2000年に仙台司教に叙階され、仙台に赴任した溝部脩司教は、「私は若者が大好きで、これまでも青年司牧に力をいれてきました」とおっしゃっていた。その溝部司教様が、仙台に来られてから立ち上げられたのが「東北塾」である。この東北塾の設立趣旨は「カトリック学校の中核を担う教員の育成を目指す」こと。

「東北塾」で検索しても、出てくるのは学習塾の宣伝ばかり。今の日本に必要なのは、もっと精神性豊かな人間中心の必要に応える教育であろう。

今回、コロナ禍の間は、中止していたが、再開されて、第16回の東北塾が9月19日(木)と20日(金)の2日間、カトリック元寺小路教会信徒ホールを会場に開催された。参加者は、青森、岩手、宮城、福島、秋田の各地カトリック学校の教員16人が参加し、活発な意見交換などをした。

講師は長崎南山・中学・高校の校長を務める、有名な教師。もう一人の講師はカリタス女子中学・高等学校長の萩原千加子先生。萩原先生の講話は「カトリック学校に呼ばれて―神は力なき小さき者を使う―」というものであった。

早く、この活動が成長し、人々が東北地区のカトリック小中高学校に「行ってみたい。あそこで学びたい」と言ってくださることを祈っている。

Sr. 長谷川 昌子（仙台教区広報委員）

2024年 仙塩地区連合婦人会(あけの星会)黙想会開かれる

11月19日、会員90余人が集まり、2024年度の仙塩地区連合婦人会(あけの星会)の黙想会が、元寺小路教会大聖堂で開催された。指導司祭は、幸田和生司教。テーマは「シノドス2021－2024を終えて」。朝10時から静かな祈りの深めの時を過ごした。

（紙面の都合上、内容は次号に詳細を掲載）

訃 報

スール マリア 大野 節子（おおの せつこ）
（聖ウルスラ修道会 一本杉修道院）

〈略 歴〉

1931年	5月20日	宮城県仙台市生まれ
1951年	3月25日	畳屋丁教会で受洗
1953年	4月 6日	入会 聖ウルスラ修道会 木ノ下修道院
1956年	8月31日	初誓願
2024年	10月17日	帰天 93歳

〈主な使徒職〉

1953年から学校現場での教職に携わる。
中・高等学校に専門科目は社会と国語。
聖ウルスラ学院小学校・中学校・高等学校教諭
八戸聖ウルスラ学院高等学校教諭
聖ウルスラ学院高等学校非常勤講師

※教職の免許をとるために、学校で教えながら通信教育で勉強した。
さらに東北学院大学大学院で国文学を専攻し、文学修士を取得した。

スール マリア マグダレナ 川又 憲（かわまた のり）
（聖ウルスラ修道会 一本杉修道院）

〈略 歴〉

1932年	3月22日	神奈川県川崎市生まれ
1959年	8月15日	一本杉教会で受洗
1961年	8月30日	入会 聖ウルスラ修道会 木ノ下修道院
1964年	8月30日	初誓願
2024年	10月25日	帰天 92歳

〈主な使徒職〉

終生誓願宣立後、八戸白菊学園購買部勤務。
1977年～1983年まで暁星園（仙台市）勤務。
2022年暁星園に入所するまで、八戸の共同体奉仕に従事。
特に、修道院会計係（営繕）や車両の運転などを何年にもわたり引き受けていた。

■特別寄稿■

東北キリシタンのふるさと・・会津〈その４〉

明治初期まで続いた厳しい弾圧、そして近代へ

厳しい弾圧は 1600年代前半から200年以上続きましたが、ようやく19 世紀後半の、1862年 1 月には横浜山下に外国人のためにカトリック教会（横浜天主堂）が建てられました。ところがそれを見学に行った日本人がみな逮捕され、投獄されました。

その２年後には長崎に大浦天主堂が完成しました。献堂式には長崎奉行も招待されましたが欠席しました。その翌年、ここで隠れて信仰を守っていた15人の信徒がプチジャン神父に信仰告白をしました。いわゆる『信徒発見』です。

そして、ここで信仰告白をしたたくさんの信者が逮捕・投獄されたのです。『信徒発見』から２年後の 1867 年には、いわゆる『浦上四番くずれ』がありました。当時はまだキリシタンであること自体が犯罪であると認識されていました。

仏式の葬儀を拒否したことで、キリシタンであることがわかったという、高木仙右衛門ら68人が捕縛されて厳しい拷問を受けたのです。旧幕政時代にも劣らない弾圧は、明治に入っても続きました。延べ3394人の逮捕者を数百人ずつに分けて、安芸や備前などに流刑にしました。

牢獄は不潔極まりなく、当時の公文書には家畜並みの扱いだったことが記されています。このような扱いに諸外国からの抗議を受けた明治政府は、キリシタン弾圧が不平等条約の最大のネックになっているということに気づき、ようやく、1873 年（明治６年）２月24日に、キリシタン禁令の高札を下したのです。この間に配流された3394 名のうち662名が拷問などで命を落としました。生き残った信徒たちは流罪の苦難を『旅』とよんで信仰を強くし、故郷浦上の地に小聖堂を建てたのです。（現在の長崎･浦上天主堂です。）1879 年のことでした。

この 1879 年に、会津若松にはヴィーグルー神父が入り、東京築地教会の巡回教会となりました。

そして、1885 年に会津若松が小教区として独立し、その後１～２年の間に福島、郡山に次々と教会が設立されました。また、翌 1886 年には、南会津の田島に布教所が開設されました。

会津若松教会の近代の流れを概観して見ますと、小教区となる前年の 1884 年には、オズーフ司教によって初の堅信式が行われています。

1912年には現在の聖堂が完成して、ベルリオーズ司教によって献堂祝別式が行われております。

1928 年には最初の会津出身の神父である大久保俊作師がローマで叙階されました。

1934年には大神学校入学のための予備神学校が会津若松教会に開設され、後に会津出身の神父となる、児山六七男師、平塚秀雄師などが学んでいました。会津出身の司祭は今日までに七人います。

歴代主任司祭の中から、東京大司教・枢機卿の栄職にあった土井辰雄師が出ています。

1990 年代の会津若松教会、佐藤千敬司教とともに

ＪＲ東日本の発行する冊子に掲載の『みちのくへ！教会建築を訪ねる旅』という特集記事で、キリスト教のいくつかの教派の教会が紹介されていて、カトリックの教会も、弘前、鶴岡、山形の教会が、美しい写真入りで紹介されていました。その記事の終わりに「教会は祈りの場です。マナーを守って見学しましょう。」とありました。この現代、殉教者の時代と違って自由に信仰を持つことができて、（キリスト教とは直接関係のないＪＲ東日本のような）一般社会からも、祈りや信仰が大切にされ、キリスト教が好ましく受け入れられていますが、それだけに私は、現代の信徒の課題は、日本社会の、そして世界のいたるところにあると、強く感じています…。

佐藤　大（まさる）（郡山教会）

〈参考資料〉
溝部脩司教講演録『マテウス･アダミの生涯と会津の切支丹』
アーミン・クレーラ編著　『会津のキリシタン』
只野淳著　『みちのくの切支丹』

編集後記

いよいよ 25 年ごとに開催される「2025 年聖年 - 希望の巡礼者」が始まります。世界中で紛争や災害が絶えない中で、少しでも希望が持てるような教区報を皆様と一緒に作って行きたいと思います。

仙台教区広報委員会では、皆様から原稿を募集しています。投稿は随時受け付けていますので、下記のアドレス宛てにメールで添付ファイルでお送りください。手紙の場合は教区事務所宛てに郵送してください。　（関　毅）

c-hasegawa@blue.ocn.ne.jp　　**次号発行予定日：３月１日(日)　原稿締め切り：１月 19 日**